

モンスターハンター ～ 月迅竜の狩猟～

不憫な死神

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、小さい頃から一人になっていた一匹（一人）の狩猟

目次

プロローグ

1

1話

6

プロローグ

???
side

古い塔の上、血まみれの地面、そして…そこら中に散らばってる、人間と…力無く倒れながらも今にも襲い掛かって来ようとする血まみれの…

お父さんとお母さん

「ツハ！」

…夢

「なんだ〜夢か〜」

私は悪夢を見た。

その悪夢はリアルで今にも殺される様な景色が広がっていたり、何処なのかわからな
い塔の上で血まみれの地面に座っていたりっと言う悪夢、その後のことは何時も忘れ
る。忘れてはいけないのに…忘れてしまう。

「ご主人！大丈夫かによ？」

「う、うん大丈夫だよ【マニ】」

今【ガーグア】を運転していてパートナーと言える程の仲のオトモアイルーのマニが心配してくれる。

実はマニとは気づいたらいたつと言う感じだ。ちなみに名付けは私がした。何故こんな名前にしたのかって聞かれたら、生肉から来てるのしか言えない。

「とりあえず！後少しで【ユクモ村】ニヤ!!」

「え！本当!？」

ユクモ村

温泉等で有名な村で今日から其処に専属ハンターとして住むことになった。

「あくユクモ村に着いたら何しようかなく先ずは温泉に入つて、それで入りながら温泉たまごとドリンクとか飲んでくキヤー！もう何をするか迷っちゃうよ！」

「ダメだこれ早くにやんとかしないとや…つてうにや？」

「どうしたの？マニ…つて雨？」

「らしいですよにやね」

「と、とりあえずマニ！濡れるのは嫌だから急いで!!」

「わかりましたにや!!」

マニがガーグアを加速させる。

「うー…何でこんな日に限って…しかも嵐になってきたし!!」

「異常だにやね」

「うー…つてマニ！前！前!!何か居るよ!!」

「うにゃ!?!」

マニが急カーブさせる。

…さて、今私達が居るところは「溪流」と呼ばれる場所のガーグアタクシーが丁度入れる場所を使って移動している。

此処で急カーブしたらどうなるか。

荷車から落ちます。

「マニのバカアアアアア!!」

「ぐ、ぐ主人…!!」

私は荷車から落ちた瞬間

ベシッ

そんな擬音がつく感じで何かで弾き飛ばされた。

「痛ッ！」

何かで弾き飛ばされたから痛い

だがその前に

「お、落ちるうううううう！きやあああああああ!!」

そして地面に後数メートル…の前に荷車に拾われる。

「ご主人！大丈夫ですかにや?!」

「大丈夫じゃないよー！うー…痛い。それよりアレ何だろ」

私が振り返った時嵐の中で余り見えなかったが何か空に向かって吠えていた。

数分後

「はあー… やつとユクモ村に着いたく！」

「ですにやね… ご主人、ガークアタクシー返してくるから駄賃を少ししてくださいにや」

「うんわかった… えーつと1000zでいいよね？」

「それで良いですにやよ」

「じゃあ、私は先に行ってるよ！先ずは！温泉だく!!」

ユクモ村についたハンター

その名は…

ニア

1話

「ハフツング！モグツモグモグ… おかわり！」

「ハハハハハ！嬢ちゃんよく食べるじゃないか！よし！店主！俺もおかわりだ!!」

此処はユクモ村のとある料亭。

其処で一人の少女と渋い声をした男が食事をしていた。

だが、此処で問題なのは… 少女が食べている量だ。

この料亭はユクモ村では人気がある店で何もかも美味しいと言える。

店員は店長含め5人いや、正確には1人と4匹だ。

そんな料亭でもメニューはたくさんある

大体100通りある。

…つまり少女は現在進行形で100通り以上の料理を食べ尽くそうとしているのだ。

これには店長と店員は愕然として食材に在庫を心配する。

「食べた食べた… すみません、代わりに支払ってもらっちゃって」

「気にするな、たかが10万Z安いものだ。」

「10万Zを安いつて……」

「さて嬢ちゃん、今更だが自己紹介といこうか俺はジョン、しがないハンターだ。」
「ニアです。よろしくねジョンさん」

男「ジョンは照れ臭そうにさん付けはやめてくれつと言う。
呼ばれ慣れていないんだろう。」

「それでニア、見た所お前さんもハンターだな？」

「はい……。まああちこち転々としてるんですけど」

「それでも、結構腕が立つんだろう？あの月迅竜と呼ばれるモンスターの装備を着ているんだからな」

月迅竜「ナルガクルガ希少種と呼ばれるモンスターのあだ名みたいな物だ。

月白色に輝く美しい体毛で身を包んでいることからこう呼ばれている。

「ええつと……実はまだハンターランクは5で……」

「なに!?では、その装備は……?」

「母の……遺品です」

少女、ニアは口ごもりながらもそういう。

ジョンはそれを聞くと謝った。

それに対し、ニアは気にしないでつとと言う。

「ふむ…… さてこれから俺は一狩り行くとしよう！ニア、次会えた時は一狩り一緒に行こうではないか」

「はい、分かりました」

「ではー！」

「ふう…… 嘘をつくのは大変だなあ」

私が月迅竜って知ったらどう思うんだろうか？

もしかしたら狩りに来るかもしれない。

「ご主じくん！探したにや〜！」

「あ、マニ」

「…… あれ？もしかしてもうご飯……」

私はニカツと笑いながら

「ごちそうさまでした！」

マニにそう言う。

この瞬間マニは膝から崩れ落ちた。

「ボク：： まだ何も食べてニヤイ：：」

「ほーら、いっくよ！ マニ！ 今度は温泉とドリンクなんだから！」

ニアはそう言うのと駆け出す、マニを置いて。

集会浴場に向かう。

マニは慌てて追いかける。

一方その頃、ジョンは

「ツク：： やはりきついな：： イビルジョーの後にティガレックスとナルガクルガの同

時討伐は：： ガクッ」

「二名様キャンプ送りニヤー！」

「でも、クエストクリアしてるニヤー!!」

「この場合ってどうにやるのー!!」

無論、差し引かれます。